

バブル獄中記 長田庄一

検事の取り調べは午前と午後、夕食後の一日三回。夕食は四時三〇分。その前に音楽放送に合わせて室内の体操（自由だ。私はやらない）と、牛乳、コーヒー、アイスクリームの支給である。夕食が外部より早いのは、職員が五時に帰るため。

本を読んでもよいと思うが、歴史ものはともかくとして、他人の下手なつくり話は自分の80年の多彩な人生に比べると、興味もわかない。それに最近、内容のない、つまらない文学の本などを読むと、若いときと違って、かえって疲れる。

「百万円のお年玉がおかしいか。君は貧乏人だから経験がないんだろうが、今どきは赤ん坊でも三万や五万のお年玉は貰うものだ」と言うと、歳のいった刑事が例の「上申書」とかいふ書面に何かを書き込みながら、「本当にお年玉ですか」と聞いてくる。

私は「お年玉といっても、県庁は当行の大口預金先だ。それに、これは政治献金でもある」と言い直すと、刑事は「預金はいくらか」などと言って、事件にでもするつもりなのか、その文書の作成を急いでいる。

そこで私、

「正月の政治献金がいけないのか。それを事件にでもするつもりか。そうだとすると、私の正月のお年玉、お礼参りは山梨県庁ばかりではない。日ごろお世話になっているところ、まだほかにもたくさんある。それもみんなそこに書いて……」

「どこですか」

「警察だ。特に世話になっている赤坂署と池袋署、それに碑文谷署、これは毎年だ。行かなくても向こうから取りに来るよ。お正月の武道会のお酒代だ。何十年間も続いている。恒例だな」

「赤坂、碑文谷は銀行の本店と会長の自宅のあるところだから、よく分かる。だが、池袋は？」

「三ヶ所だけではない。当行にはあなた方のOB署長が何人もいる。だから、本庁の総監室にも挨拶に行く。それに池袋は昔、当行の本店のあったところだ。それから……」

と言って、さらに言い継ごうとすると、年輩の刑事が私の話を両手で遮って、

「そうですか……」と言うと同時に、いきなり取り調べを中止して口を閉じ、何事かを考えながら私の目の前で、取調室の机の上にガバッと手を突き平身低頭、平蜘蛛のようになり、「いつもお世話になっております」と言いつつ、私の後ろを歩いている若僧に「座れ」と指示し、私に刑事自身の書面を見せ、「ここから先は全部消します」と。

後は「私も定年が近いので、そのうちに会長のご厄介になるかもしれない。そのときはまたどうぞよろしく」と雑談になり、それが終わると、二人はバツの悪そうな顔をして立ち上がり、後ろも見ずに帰っていった。

私は高名な大学などを出たサラリーマン社長ではない。戦場帰りの七八歳、自分で銀行をつくってここまで経営をしてきた事業人、戦後の焼け跡から這い上がった最後の男だ。

東京という世界一、魑魅魍魎の金権亡者がウヨウヨしている都会のど真ん中で、金融をなりわいとして五〇年間生きてきた人間である。銀行だから、年寄りだからと甘く見ると、当が外れる。

東京地裁は〇三年二月、長田元会長に懲役三年、執行猶予五年の有罪判決を言い渡した。長田元会長は〇四年、東京高裁への控訴を取り下げ、一審判決が確定した。他の四人も最高裁で有罪が確定した。

東相銀は〇一年、米国投資ファンドのローンスターに営業を譲渡し、東京スター銀行となった。新銀行の創業日は、東相銀が破綻した日付と同じ、六月一日だった。

ローンスターは〇八年、国内投資ファンドが実施した株式公開官員い付け（TOB）に応じて保有株を売却した。米国のファンドが手にした売却益は、最終的に二〇〇〇億円を優に上回った。

長田氏は一〇年二月一五日、がんのため都内の病院で死去した。八七歳だった。葬儀は近親者だけで執り行われた。